

## 目白大学児童教育学科「世界音楽の鑑賞と表現」（4年生対象）授業実践報告

小林, 恭子  
目白大学人間学部児童教育学科 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/4822559>

---

出版情報 : オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp. 53-53, 2021-04-30. 雷音学術出版  
バージョン :  
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

## 1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業は、世界の多様な土地・時代に育まれてきた音楽の鑑賞を通して、異質な文化やその成立背景に関心を持ち、実際に表現してみることによって音楽・芸術の多様性や可能性などについて考察することが目的である。卒業を控えた4年生が受講する「発展科目」として位置づけられている。2020年度は、本学科4年生の8割が履修した。

授業形態は、講義及び鑑賞7割・表現3割で考えていた。しかし、2020年度はオンライン授業になったため、表現内容を取り入れながらも講義及び鑑賞に比重を置かざるを得なくなった。授業は、ZOOMを用いた同時双方向型で行った。毎回ピアノ等の楽器を演奏したり歌ったりするため、Focusrite社のオーディオインターフェイスを使用した。鑑賞は、GoogleClassroomに動画等を資料として提示した上で、授業中に視聴させた。

具体的な内容は、第1回から第7回まで西洋音楽史(古代から現代)の講義・鑑賞・表現を行った。第8回は中国の文化や音楽、第11回はモンゴルの音楽や楽器、第13回は琉球の芸能や文化について、それぞれ外部講師を招いて講義・鑑賞・表現を行った。第9回はミュージカル音楽、第10回は映画音楽、第12回は世界平和の音楽を取り上げ、西洋音楽・世界音楽の発展形として身近な音楽を扱った。第14回は、歌う動画を提出するリモート合唱(英語歌唱)に取り組んだ。第15回は「映画音楽を作ろう」で、課題動画に合った音楽を創作させデータで提出させた。

成績評価は、毎授業後のGoogleForms、音楽創作、平常点で評価した。例年最終レポートを課していたが、毎GoogleForms課題が最終レポートに代わる質と量になったため、変更した。

## 2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

本授業は、講義だけでなく鑑賞や表現等の演習を多く用いることで、実践的に文化を学ぶことを重要視しているが、オンライン授業では実際に学生の表現は見えづらかった。授業内で、イタリア語の歌、ドイツ語の歌、

中国語の歌、英語の歌など歌ったが、学生の声聴くことはできない。50人近くが一斉にマイクをonにしたら雑音等が多々生じ、さらには時差が生じるので同時に歌うことは不可能である。GoogleFormsを見ると「歌ってみて、~だと感じた」などコメントしてあるので、歌ってみたことはわかるものの確認はできない。また実技習得の授業ではないので、歌っている動画を毎回提出させることなどは難しい。

今後につながる可能性としては、ライブ配信を行うことができた点があげられる。第8回の中国人外部講師は、大学に来ていただき、筆者が機材を整えてマイク等をつなぎ、講演だけでなく歌唱をリアルタイムで披露していただいた。第11回の馬頭琴奏者は、札幌から専用機材を用いて質の高いライブ配信を行っていただいた。毎授業でも、授業者側の演奏の音声には気をつけ改良を重ねていった。しかし、いくらこちらの環境が整っても、受講者のインターネット接続状況によっては生配信も途切れ途切れになってしまっただろうと予測している。

受講者の反応はGoogle Formsを見る限り、個人差はあれども、音楽・芸術の多様性や可能性などについて自分なりに考察できていた。最終課題の音楽制作は、実に多種多様な方法で作成された音声データが提出され、今後の可能性を大きく感じた。学内の電子ピアノを使用可としたが、大学に来られない学生もいることから、制作方法は自由にした。そのため、音楽作成アプリで作曲したり、ピアノやギターで自ら作曲・演奏したり、既存の効果音や曲を雰囲気や組み合わせたりする学生などがいた。次年度本授業は対面で行う予定だが、いくつかの内容は今年度の方法を踏襲したいと考えている。